

氏名	よし だ あつ ひこ 吉 田 敦 彦
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学位記番号	論 教 博 第 122 号
学位授与の日付	平 成 18 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ブーバーの対話的人間形成論 ——そのホリスティック教育研究への寄与——

論文調査委員 (主査) 教授 矢野智司 助教授 齋藤直子 教授 田中毎実

論 文 内 容 の 要 旨

本論文のテーマは、ブーバーの対話論と人間形成論に関わるテキストを、現代のホリスティック教育研究が抱える問題意識に照らして読み解き、その意義を明らかにしようとするものである。本論文は「序」と8つの章そして「結」とからなっており、全体が「『聖なるもの』とブーバーの対話論」と「『全体性』とブーバーの人間形成論」の2部に分かれている。

まず「序」では、この本論文全体の問題意識と構成とが簡潔に述べられる。第Ⅰ部第1章では、現代のホリスティック教育研究が概観され、一方での合理主義と他方での伝統宗教との対抗のなかで、ホリスティック教育研究が「トランスパーソナル」や「スピリチュアリティ」といった用語で脱俗聖別として「聖なるもの」を考察してきたことの問題点が指摘され、ブーバーにおける「聖なるもの」の考察が、この問題点を克服するうえでキーワードとなることが明らかにされる。第2章ではこの課題を受けて、ブーバーの対話論をなす「出会い」と「対話」という基本概念が、物語論と他者論を手がかりに吟味され、そこからブーバーの聖なるものの次元が捉えられる。さらに第3章では、ブーバーのもう1組の基本概念である「〈我-汝〉」と「〈我-それ〉」が取りあげられ、両者の一方のみで安住することのできない人間の「根本的な二重性」を明らかにされる。そのさい「〈我-汝〉」に含意される「自然との一体感」というロマン主義的な傾向が、レヴィナスによって鋭く批判されたことが示される。第4章では、このレヴィナスの批判を受ける以前に、すでにブーバー自身が忘我陶酔的な体験が他者からの呼びかけを聴けなくし責任ある応答を阻むことに気づき、忘我的神秘主義を批判していたことが明らかにされる。そして、ブーバーはこの他者への応答的な対話においてこそ「聖なるもの」に出会うと考えたことを明らかにし、ブーバーの「聖なるもの」と「応答的対話」の内的関係が示されるにいたる。

第Ⅱ部では個人主義と全体主義とを克服するために、ブーバーが「向かい合う二人」の対話関係として「全体性」を捉え、さらにそこから対話的な人間形成論を構想したことが示される。まず第5章では、個人主義と全体主義に対する第3の立場として「二人で全体」と捉えるブーバーの「対話的全体観」が論述される。そして第6章では、他者への「距離をとること(原離隔)」と「関わること」という後期のブーバーの基本概念が提示され、特に「距離をとること」が強調され他者の他者性が強調され、そこから「向かい合う二人」が人間を捉える根源的カテゴリーであることが示される。さらに第7章では、ロジャーズにたいするブーバーの異議を手がかりに、教育的関係におけるこの「向かい合う二人」の関係は相互的・対称的なものに留まらず、援助者は対話のなかで〈世界〉の形成力を確証し、他者に応答する責任のために被援助者に対して非対称な関係をもつことが論じられる。第8章では、さらにブーバーの教育と人間形成に関するテキストが総括され、教育者は〈世界〉の形成力を頼りに、向かい合う相手に応答する対話を通して、その形成力が被教育者に働き出るといような通路を開くという任務をもつと論じられる。そして「結」では、ブーバーの「聖なるもの」における「応答性」、そして「全体性」における「向かい合う二人」「他者性」の思想が、ホリスティック教育研究へ寄与し新たな可能性を開くものとして論じられる。

論文審査の結果の要旨

M. プーバーはユダヤ系の哲学者・宗教学者であり、『我と汝』の作者としてよく知られている。プーバーの教育学研究としては、すでにボルノーらによってなされており、また日本では齋藤昭や松田高志などによる先行研究がある。そのような先行研究にたいして論者は、論文の副題「ホリスティック教育研究への寄与」が示すとおり、ホリスティック教育研究の観点からプーバーの理論を「対話的人間形成の理論」として読み解こうとする。

このとき論者はプーバーの理論を「聖なるもの」に関わる垂直の軸と「全体性」に関わる水平の軸という2つの軸に分けて考察する。この2つの軸は、プーバーの人間形成論を論じるために構造化された枠組みであるとともに、ホリスティック教育学における内在的な発展のなかから問題を捉えるために導出された枠組みでもある。この2つの軸を設定してプーバーのテキストを読み解くというこの枠組みの作り方に、従来のプーバーの教育学研究にたいしてまたホリスティック教育研究にたいして、本論文の優れてオリジナルなところがある。総じてこの枠組みの設定は成功しており、本論文は教育を思想の必須の契機として内包するプーバーの研究としてもホリスティック教育研究としても高く評価することができる。このように捉えることで、プーバーを伝統的な宗教への回帰ではなくまた神秘主義的な直接体験の重視でもなく、他者との応答的な対話の場において聖なる次元をみるという「狭き尾根道」を歩もうとした人間形成論の思想家として捉えることが説得力を増し、転じてホリスティック教育研究が直面している隘路を突破する方向が明確になったからである。

また、論者がレヴィナスによるプーバーへの批判を手がかりにプーバーのテキストを丹念に再読し、プーバーの他者の捉え方に焦点を当ててプーバーの人間形成論の可能性を論じたことは評価することができる。論者によると、プーバーはその初期において忘我的な神秘的体験を高く評価していたが、1914年に忘我的体験がさめやらぬときに自分にアドバイスを求めて訪れた青年の問いかけを聴き取ることができず、後にこの青年の死を知ったプーバーは、忘我的体験への評価を改め、目の前にいる人と向かい合うこと自体が聖なることであると考えようになったという。この他者を巡る「転向」によって、『我と汝』において、すでに自然や芸術作品との主客が一体化する広義の〈我一汝〉と、他者との自他が合一的に融合することなく「我」と「汝」の「間」に領域が開かれる狭義の〈我一汝〉とが使い分けられていることを指摘している。そして後者の狭義の〈我一汝〉を特にその「我」と「汝」の「間」を強調して〈我と汝〉と名づけ、プーバーを読み解く際にこの差異を区別するように要請する。論者はこの他者の他者性を捉えた狭義の〈我と汝〉の立場から、プーバーの教育に関わるテキストを読解していくことで、従来にないプーバーの人間形成論を提示し得たといえる。

しかしながらいくつかの問題点もある。まずプーバーの思想研究としては、宗教思想との関連づけが不十分であること、またこのプーバーの〈我と汝〉の解釈では、レヴィナスの他者論からの批判に十分に応えていないのではないかと考えられる。また先行研究との関係でいえば、今日の教育学研究との関連は詳しく述べられているのだが、プーバーの教育思想に関わる先行研究との関連づけが弱い。さらに論文自体の整合性では、プーバーの他者論は本論文では基本的に狭義の〈我と汝〉の視点で論じられているとはいえ、いくつかの箇所では広義の〈我一汝〉的次元にとどまっている。もちろん、このようにいくつかの問題点があるとはいえ、これらの問題点はいずれも論文の全体の評価を損なうものではない。

よって、本論文が博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また平成18年7月18日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。